

文章産出における修辭的及び内容的意識に関する検討

堀 田 朱 美

問 題

日常、我々は様々な目的のもとに文章を書いている。論文・記事・文学作品等、不特定多数の対象に向けて書かれた文章もあれば、手紙のように特定の一人に向けて書かれたものもあり、さらには、日記のように誰にも読まれないことを前提とした、強いて言えば後日の自身にあてたものもある。十代の頃には、発表を目的とせず、むしろ誰にも読まれないよう、隠すようにして詩や小説を書くこともあるが、これは自分の中にある感情の高まりを、文章を書くことによって発散させようとした、もしくはその時期にありがちな願望から美しい文章を書く自分を演出する為のものであろう。これらの文章は、どのように書き分けられているのであろうか。言い換えると、それぞれの文章を書く際に、何が意識されているのであろうか。

まず、文章を2つの視点から捕らえてみる。

1つは、文章を意味から分類する視点である。意味には、情報伝達の (informative) 側面と情意的 (affective) 側面がある (新・教育心理学事典, 1984)。文章にも同様の2側面があると考えることができる。そして、どちらの側面に重点が置かれているかによって、文章を分類することが可能である。これは目的による分類と言い換えることもできる。情報を正確に伝えることを目的としているのか、情意に働きかけることを目的としているのかという分類である。小林 (1989) は、情意的な文章である短歌と、同じ内容を情報伝達的に書き換えた散文とを比較し、描かれていることが時間と共にどう変わって行くかを作話させたところ、短歌の方が作話量が多くなると報告し、これらの文章の差異を明らかにしている。

もう1つは、文章を枠組みから捕らえる視点である。文章を、内容的 (content) 側面と修辭的 (rhetorical) 側面から捕らえる。Scardamalia, Bereiter & Steinbach (1984) は、作文の Dual Problem Space Model で、内省的 (reflective) 思考は、内容スペース

と修辭スペースの2方向的コミュニケーションからなっていることを示している。

情意的・情報伝達のという視点も、1つの文章の異なる側面を見ていると言える。しかし、どちらかと言えば文章の分類に主眼が置かれているのに対し、内容か修辭かという視点は、完全に1つの文章を異なる側面からみたものである。本研究では、文章をこちらの視点から捕らえてみたいと思う。つまり、それぞれの文章を書く際の意識が、内容に主体を置いたものか、修辭に主体を置いたものであるかという点からアプローチしたい。

これら2つの視点の間には、一見「情報伝達-内容」「情意-修辭」という呼応があるようにも見えるが、情報をより正確に伝える為の修辭的工夫ということも考えられるので、互いに独立であると解釈してよいであろう。

内容的な問題は書き手の中で完結していてもかまわないが、修辭的な問題を考える場合、読み手の存在を無視できない。読み手なしには、修辭的な工夫は意味を持たない。読み手は他者である必要はない。時間が経過した後の自分ということも考えられる。内田 (1986, 1989b) は、小学校に入学する前後の子どもの言語活動の中に、口頭で物語を作る・作話の計画を立てる・文章の産出過程をモニターする・文字に書く過程で読み返す、といった行動が観察できることから、この時期に話し手から聞き手、書き手から読み手が分化し始め、自己内に聞き手・読み手を持ち始めるとしている。つまり、読み手に対する意識、及び読み手としての視点は、書き手としての視点から派生するものと考えられる。そこから本研究での仮説「年齢が高くなるに従って、修辭的な意識が増加する」がたてられる。そこで対象としては、言語能力が完成していると思われる成人と、発達の途上にあると思われる児童を設定した。

題材として、従来の文章に関する研究では作文・意見文が用いられることが多かった。しかし、それらの文章は特に教示がない場合、読み手を誰であると想定するかが難しい。そこで、題材としては、被験者が共通の読み手を想定しやすいものを用いることが望まれるので、幼

児が対象であることが明らかな物語の創作を設定した。できるだけ自然で自発的な内観を対象とする為、教示では読み手が誰であるかには触れず、物語の発端部を与え、その続きを創作させるという内田(1980)に準じた手法をとった。発端部を与えたのは、対象の負荷感を軽減させる為と、文章産出の研究の常として、個人による差が非常に大きくなることが予想される為、分析が可能な範囲に反応を収束させる為である。成人は、幼児対象の物語の創作という状況に抵抗なく入っていけると考えられる保育専門学校の2年生、児童は内観を報告できる能力を考慮して、小学校高学年とした。

文章産出時の書き手の意識は、主にプロトコル分析によって検討されてきた。書かれた結果としての文章を分析した研究もあるが、そのデータから推測されることには限りがある。そこで、より詳しくプロセスを検討する手段として、プロトコル分析という手法が定着したわけだが、それにも幾つかの問題はある。

まず、プロトコルの採取が可能となる対象が非常に限定されていることである。Hayes & Flower (1980)は、50名を対象とした際、有用なデータが得られたのは2・3名であるとしているし、内田(1989a)も小学生を対象としたプロトコル分析で、作文が得意ということで特に教師から選んでもらった10名から更に1名を主対象、1名を補助対象として選抜している。いきおい、プロトコルを産出できる人物に偏りができ、結果を一般化することに問題がでてくることになる。予め対象が限定されているうえに、分析方法が煩雑であり、多くを対象とすることができず、統計的な検討も難しい。しかし、複雑な文章産出のプロセスを解明するのに、これがもっとも有効な方法であることの説得力に変わりはない。

本研究では、この対象が限られてくるという問題を考え、文章産出のプロセスについて、実験的調査を実施する。従来のプロトコル分析で手薄になっていた部分を、少しでも補うことが目的である。故に、項目は特に設けず、自由記述とした。

方 法

目 的 物語を創作する際に、どのような意識がなされているかの年齢による差異を、内観から明らかにし、仮説を検証する。

対 象 成人群・保育専門学校生 244名
児童群・小学5年生及び6年生 246名

実施期日 成人群については1991年9月、児童群については1992年4月

手 順 内田(1980)の手順を参考に、途中まで書かれた物語の続きを創作し、創作時の内観を後から自由記

Table 1 題材文の例(トト)

きんぎょのトトはきんぎょばちの中でいつもひとりぼっちでした。ですから、トトはまいにち、空をながめていました。まどの外を、いろいろな雲がとおりすぎました。「あっ、きんぎょの形をした雲だ!」空をながめていたトトは、うれしくなって、からだをひらひらさせました。「あの雲がきつと、ぼくのともだちなんだ。どうしたらあそこへいけるんだろう?」ふわあり、トトのからだがちゅうにうきました。まどから空へむかっとおよぎだしたのです。赤いふうせんは、しんせつな小鳥がもってきてくれたのです。

述で示す形式を取った。各学校のクラス単位の集団(専門学校は80名から100名。小学校は35名から39名。)で調査を実施した。問題用紙を配布し、教示を与え、翌日提出(専門学校は翌週)するように指示した。成人群では実験者が、児童群では各クラスの担任が、教示を与えた。材料及び教示 内田(1980)より、「トト」「おるすばん」の2種を発端部として用いた。Table 1に、例文を示す。

児童群では、以下の通りの体裁で、調査用紙を作成し、用いた。全体は3ページであり、①フェイスシート。タイトル「物語を作る」。教示「これは、学校の勉強ではありません。みなさんが、想像力を働かせて、好きなように物語を作ってください。ページをめくると、お話がとちゅうまで書いてあります。よく読んで、続きを思ったままに、書き込んでください。」。学年・性別・氏名の記入、②教示「ここにとちゅうまでしかないお話があります。みなさんだったら、このお話のつづきをどんなふうにしたいですか。好きなようにつづきを書いて、お話を終わらせてください。」。発端部、③教示「このお話をつくる時に思ったことを、なんでもいいですから、書いてください。たとえば、どんなふうにかんがえたとか、どんなことがむずかしかったとか、たのしかったとか、できるだけわしくおねがいします。」、謝辞「どうもありがとうございます。」。からなる。成人群では、これに準じた教示を口頭で行なった。

結果と考察

①量的検討 創作部分のみで内観のないもの、及び教示が正確に伝わっていないと思われるものを無効とした結果、有効データ数は、成人群238、児童群220であった。無効の内訳は、成人群では、内観のなかった者2名、11

Table 2 各群で得られた内観数の平均

() 内はSD

	内容的内観		修辭的内観		その他		総 数
	数	%	数	%	数	%	
児童 (N=220)	.91 (.96)	43.23 (40.71)	.14 (.38)	5.48 (18.22)	1.31 (1.57)	51.29 (42.20)	2.36 (1.41)
成人 (N=238)	1.91 (1.67)	41.54 (33.23)	.70 (1.25)	12.08 (20.01)	2.48 (2.17)	46.39 (35.24)	5.08 (2.74)

頭で教示を与えた為か、内観と間違えて感想文を提出した者4名である。児童群では、無効となった26名すべてが、内観を書いていなかった。得られた内観を1文を基本とした単位に分割する。それらを、文章の内容的側面に関するものか、修辭的側面に関するものかを基準に、「内容的内観」「修辭的内観」「その他の内観」の3種に分類した*。分類の結果をTable 2に示す。

内観の総数の平均値の差が、群間で有意であった為(t=13.05, p<.01), パーセンテージを角変換した値で2(群)×3(分類)の分散分析を行なった。その結果、群の主効果(F(2,456)=45.54, p<.01)・分類の主効果(F(2,912)=132.95, p<.01)・交互作用(F(2,912)=3.01, p<.05)が有意であった。Tukey法で分類の下位検定を行なったところ、それぞれの間の差が有意であった(内容-修辭, q=18.15, 修辭-その他, q=21.3, それぞれ p<.01, 内容-その他, q=3.16, p<.05)。多重比較の結果、両群間の差は修辭的な内観においてのみ有意であった(q=3.92, p<.01)。これにより、仮説は支持されたと言える。

しかし、成人群で有意に増加しているとは言え、全体に修辭的内観の占める割合は有意に低い。これは、完成した文章を推敲する際の内観を「読み手として」「書き手として」の視点から分析した堀田(1989)の、推敲による訂正は「書き手として」の視点からなされることが多いという結果と呼応していると見ていい。読み手への意識は、年齢に従って増加はするが、やはり書き手にとって最も重要な問題は、「何を書くか」であり、「どのように書くか」言い換えれば「どのように読まれるか」は付加的な役割となっている。成人と児童の文章は一読して明らかに異なるが、この違いは修辭的意識に負うものであり、「どのように読まれるか」が付加されるか否かで、文章表現は大きく変わると考えられる。

②質的検討 各群で得られた内観の中から、最も多かったもの5種ずつをTable 3, 4に示す。パーセンテージは、各セルの内観総数のうち、何パーセントにあたるか

Table 3 各群で多く見られた内容的内観

() 内は各セルの総数に対する%

群	内 観	件 数
成人群 (total=455)	①平凡になってしまう	39 (8.6)
	②最後が難しい	25 (5.5)
	③いろいろ思いついた	24 (5.3)
	④展開が難しい	16 (3.5)
	⑤アイデアが出てこない	13 (2.9)
児童群 (total=200)	①最後が難しい	23(11.5)
	②ドアを叩くのが誰かで迷った	12 (6.0)
	③お友達を作りたいと思った	7 (3.5)
	④最初が難しい	6 (3.0)
	⑤雲の上の様子が難しい 独創性を出すのが難しい 楽しい話になるようにした ハッピーエンドになるようにした	4 (2.0)

Table 4 各群で多く見られた修辭的内観

() 内は各セルの総数に対する%

群	内 観	件 数
成人群 (total=167)	①わかりやすい文になるように	17(10.2)
	②文のつながりが難しい	12 (7.2)
	③言葉を選んだ アイデアを文にするのが難しい 表現が難しい	11 (6.6)
児童群 (total=31)	①文のつながりに気がつけた	5(16.1)
	②文を考えるのが難しい	4(12.9)
	③4歳の女の子の言葉が難しい 言葉を選んだ 短い文になってしまう	2 (6.5)

* 2者で独立に評定し、2者間の一致率は.749であった。一致しなかった内観については3人めの評定者が独立に評定し、3者のうち2者が一致した分類を採用した。

を示したものである。

内田(1980)は、成人と幼児の作話が、大筋においては異なることを示したが、多く得られた内観を見ても、成人と児童は内容的に大きく異なることはなく、成人群において、より抽象度が高くなっているだけということができる。量的には明らかな差があるが、例えば、修辭的内観を示した児童は、本質的には大人と変わらない意識で文章を産出しているのである。内容的内観を例に取ると、児童群においては「ドアを叩くのが誰かで迷った」(おるすばん)、「お友達を作ることにしたいと思った」(トト)といった、具体的な内観が多い分、各反応が大きな数にはならないが、成人群では、それらをひとまとめにした、「いろいろ思いついた」「展開が難しい」という内観が上位を占めている。児童群の内観を見ると、具体的な言及が多い分、総数の割に幅の広い内観となっているが、多くの被験者に共通するものが少なく、全体の傾向は見えにくい。

内容的内観では、児童群において「最後が難しい」としたものが1割強見られ、最も多かった。成人群では、「平凡になってしまう」が8.6%と最も大きな値を示した為、「最後が難しい」は2番めとなった。内容の面では、どのような結末とするかが、最も大きな問題とされている。成人群において、最も大きな問題とされている「平凡になってしまう」は、児童群で4名(1.8%)が示した「独創性*を出すのが難しい」に通じる。しかし、児童群では「難しい」という、過程の問題とされているのに対し、成人群では「なってしまう」という、産出された結果をモニターしての内観となっている。ここから、文章を産出し終えた結果のモニター能力の違いが、児童と成人の違いになってくるのではないかと考えることができるが、それについては後に詳述する。児童群では、具体的に個々の展開についての困難を述べた内観は、成人群で3番めと4番めに多かった「いろいろ思いついた」「展開が難しい」の2点に集約されると考えてよいであろう。成人群では、いろいろ思いつき、どれに

しようか迷ったとする被験者がいるのに対し、全く逆の「何も思いつかなかった」も、その約半数見られ、頻度は5番め、全体から見ると高い頻度になっている。児童群では、「思いつかなかった」とした被験者は全く見られなかった。

修辭的内観については、「文のつながり」に関する内観・「表現の難しさ」に関する内観・「言葉を選んだ」という内観が、両群に共通している。児童群では「文を考えるのが難しい」と一括されている内観は、成人群において、漠然としたアイデアを具体的な文章に置き換える難しさ(「アイデア**を文にするのが難しい」と、より優れた表現にする難しさ(「表現が難しい」)に分化していると考えられる。いずれにせよ、児童の修辭的内観は、総数が少ない上に、1つ1つがばらばらで、頻度の順位が3番めのものが、2名に共通に見られただけとなっており、全体の傾向を見るのは内容的よりも更に難しくなっている。成人群では、17名が「わかりやすい文になるよう気をつけた」としている。これは、被験者が保育を専門とする学生であり、現場での実習も経験していた為、幼児を対象としたと思われる材料文を示された際に、受け手である幼児を強く意識したものである。このように、読み手が幼児であることを考慮した内観は、修辭的な側面では児童には見られない。内容的には、「ようちえんなみのはなしだから、こんなものでいい」という内観が得られている。成人の特徴として、修辭的な側面でより読み手を意識していることが考えられる。しかし、児童も全く修辭的に読み手を意識していないというわけではなく、「会話がづくるとわかりにくいので、雲の方に『ごんす』をつけてわかるようにした」という、読み手の存在を意識したと思われる内観が、1名だけではあるが、得られている。ここでの読み手は、幼児に限定されていない。児童群の3番めに出ている「短い文になってしまう」は、成人群でも7名から得られている。しかし、「長い文になってしまう」も同数得られている。文の長さについては、この他にも、2つを合わせたと思われる「適当な長さの文は難しい」「短い文にしようと思った」「長い文が書けない」が各1名から得られている。児童では、全体に文章がきれぎれの短いものになりがちである為、短い文をマイナスとした内観しか得られないが、成人では長すぎる文もマイナスに評価される。これは、長い文を反省する内観を書いた被験者が、実際に他の被験者と比較して長い文を書いているというわけではなく、価値観の問題を含むものと思われる。「長い」という単語が中立であるのに対し、明らかに否定的な意味合いを含んでいるので、同じ内観とはしなかった「だらだらした文になった」(5名)も、意

** 「他の子とちがうようにしたかった」「同じようなものがあるといやだった」等の意見をまとめて、こう表現したものであり、実際の内観に「独創性」という単語は用いられていない。成人群の「平凡になってしまう」は、ほとんどが内観にそのままそう言われていた。おそらく小学生は平凡という単語を、まだ自発的には使えないのであろう。

*** 「アイデア」という単語で一括したが、他に「イメージ」「ストーリー」「頭の中で考えていること」等の表現も含まれている。

味的には「長い文になってしまう」と同じであると解釈できるであろう。この他の少数の反応の中には、会話に関するものが多く見られた。「会話が難しい」「会話が多くなった」「会話と地の文のバランスが難しい」等である。

特に児童群において、「〇〇が難しい」という内観が多かったが、文章の産出が、実際に内観で挙げられた、全体のプラン・細部の展開・構想の文章化等の様々な困難な作業を必要とするということであろう。児童には内観を書くこと自体が困難であると予想されたので、内観を促す手がかりとして教示の中で、「例えば、どんなふうに考えたかとか、どんなところが難しかったとか、楽しかったとか」という手がかりを与えている点も影響している可能性がある。しかし、「楽しい」という手がかりは同様に与えられているにもかかわらず、ほとんど内観には登場しない。

③産出後のモニターに関する検討 ②質的検討で触れた通り、成人には産出の過程ばかりでなく、完了した後で考えたことに関する内観が多く、児童では見られにくい。そこには、産出後のモニターが機能しているのではないかと思われる。それを実際にデータの面から検討してみる。得られた内観のうち、無関係なことや一般論を多く含み、産出が終了する前か後かの判断が難しい「その他の内観」を除外した「内容的内観」と「修辭的内観」を、それらを分類したと同様の手法によって、「産出の過程に関する内観」「産出後のモニターに関する内観」に分類し、各群の産出後にモニターを行なったと判断された人数を Table 5 に示した。 χ^2 検定の結果、群間の差は有意であった ($\chi^2 = 79.05, p < .01$)。

児童群では、産出後のモニターを行なっているのは1割に満たず、産出後のモニターであると判断された内観も、すべて内容的なものである。「ざんこくになった」「こわいはなしになってしまった」といった、自らの創作部分に対する感想がほとんどを占めている。主人公である金魚が雲とおしゃべりをするという創作部分の内容について、「くもがしゃべってよいのでしょうか」という、適切であるかどうかを自問したものも見られた。成

人群では、内容的にも修辭的にも様々な種類のモニターがなされている。児童群で見られたのと同様の「よくあるようなはなしになってしまった」「あとから読み返すと、なんかへんな感じがしました」といった創作全体の感想、「幼児には少し理解しにくい言葉を使ってしまったかもしれません」「文章がとてもしらだらとしためりはりのない話になってしまい段落をつければ少しは話がわかりやすくなったのではと思います」といった修辭的な欠点の反省を中心に、「絵本や紙芝居なら、きっと、絵やめくり方の方法で少しスリルのあるお話になるような気がします」「実際に子どもの前で読み聞かせて、子どもが理解できるかどうかで判断しなければならないと思いました」のように読み手である幼児をはっきりと想定し、産出を終了した後の発展的な方向性を示したものが目立ったのは、保育科の2年生であり、実習も経験していることが影響しているものであろう。

討 論

内田(1980)によれば、幼児と成人に物語の続きを創作させた場合、大筋は変わらないが、表現や細部に差異が見られる。その表現や細部の違いがある為、全体の印象は大筋が同じであるとは思えないほど違ったものとなる。成人の産出する物語は完成されたもの、幼児の産出する物語はストーリー的に完結していても未熟なものという印象を与える。ここで得られた結果は、その差異と呼応していると思われる。より表現に気を使った、修辭的な工夫がなされることによって、成人の創作は完成した印象を与えるものになるようである。しかし、ここで無視できないのは、言語能力の差異と内観の差異が無関係ではあり得ないという問題である。これについては、後に詳述する。

成人群で読み手がより意識されている点についてははっきりと示されていると断言していいであろう。頻度の高い修辭的内観を見てみると、成人群でもっとも頻度の高い「わかりやすい文になるように」は、明らかに読み手(主に幼児)を強く意識しているが、児童群では見られない。児童群で2名が示している「4才の女の子の言葉が難しい」は、読み手を意識しているというよりは、登場人物の年令を考慮することで文章を整える、もしくは発端部とのバランスをとることが目的となっているように思われる。明文化された教示はないが、この題材からは被験者とは年齢層の異なる読み手の存在が暗示される。例えば、成人群では読み手が子どもであることを全く無視した複雑で長い、レポート用紙5枚にわたる創作もあったが、内観では「子ども向けにはしませんでした」と、本来ならば幼児を対象とするべきであるが、敢えて

Table 5 各群で産出後のモニターを行なった人数

	成人群	児童群	total
モニターあり	103	15	118
モニターなし	135	205	340
total	238	220	458

そうしなかったことに触れている。しかし、暗示された読み手も児童ではそれほど意識されなかった。

成人では、創作部分の目的が明示されていることも多い。「あいさつをしましょうという教訓をしたつもり」「後からみんなで、どうなったのか話し合える終わり方にした」「こどもが遊びに行きたい世界をかけたらと思いました」などである。題材を示されたときに、これらの内観を産出した被験者は保育の場面を想定し、読み聞かせる自分と聞く幼児という関係を仮定した上で創作に取り組んだのであろう。

成人では産出後のモニターがより機能していることも明らかになった。成人群の被験者は産出後に読み返すにも、「こうすればよかった」で終わっている場合と、「こうすればいいと思って書き直した」としている場合がある。後者の場合に、モニターの機能は完全に働いていると言えるであろう。「気づくこと」ではなく「訂正すること」が、読み返しの目的だからである。気づいた点を訂正するかどうかは、能力ではなく動機づけの問題であろう。

そして、これはあくまでも産出後のモニターが自発的であった場合に限定してのことである。児童群においても、産出後のモニターを行なっている被験者がみられる。Scardamalia et al. (1984) は、小学校6年生を対象としたプロトコル分析で、子どもが指導により内省的に作文を進めていけるようになることを示している。しかし、それは部分的なものであり、熟達者に見られる全体を見通してのものは見られなかった。小学生でも最終的に見られたモニターしながらの進行は、自発的なものである。安西・内田(1981)の小学校2～6年生を対象とした研究でも、作文中の部分的な読み返しならば、部分的には見られている。それらのことから、自発的にはできなくても、教示によって可能になると考えることができる。それにより、創作そのものの質が変わることも考えられる。産出後のモニターにより文章が訂正されることが、修辭-内容間の2方向的コミュニケーションを活性化し、特に困難とされる修辭から内容への流れ(Scardamalia et al., 1984)が刺激されることになれば、創作されるものも大きく変わっていくであろう。

結果を概観すると、「○○が難しい」という内観が多く、この課題は対象にとって苦しい作業であるかのような印象を与えるかもしれないが、内観全体ではそのような印象はない。「面白かった」という内観は、文章を産出する際の意識としては、内容的でも修辭的でもなく、「その他の内観」に分類された為、分析の対象とはなっていないが、群を問わず多く見られている。「お話を作るのが好き」「もっと作りたい」といった内観も、産出

には関係ないので「その他の内観」に分類されている。そして「難しい」という内観も、否定的に使われることは少なく、「作りたくない」というものも、実験者に気兼ねしてかもしれないが、見られなかった。日常的には、馴染みの薄い物語の創作という作業だが、全体的に好感を持って受け入れられたようである。

この分野では、少数の対象を深く検討するプロトコル分析が主流であったが、敢えて一般性を求めてこのような手法をとった。しかし、問題が多いことも否めない。まず、上記の通り、筆記による自発的な内観が、作文能力そのものを直接的に反映している可能性である。どのような内観を書くかは、各被験者の作文能力に大きく依存する。内観は心的過程ではなく作文能力を測る指標にしかないというトートロジーに陥りかねない。しかし、多くの対象からはほぼ一貫した結果が得られており、統計的に有意な差を示していることを、無視はできないであろう。また、実験者による辛抱強い働きかけによっては得られるかもしれないものを、見過ごすことになるという、この手法の基本的な欠点があっても感じられた。それは群間の違いだけでなく、群内にも言えることで、内観の未熟さと作文能力の未熟さの間に線はひきにくい。

これが、今後のこの分野における研究の土台として、なんらかの形で役立つことがあれば幸いである。子どもでも教示によってモニターができるのではないかというのと同様に、自発的には考えられない問題点も、言われてみればあてはまるということがあると思われるので、本研究の結果をもとに、教示を工夫する、質問紙を作成するなどの発展が考えられる。

引用文献

- 安西祐一郎・内田伸子 1981 子どもはいかに作文を書くか? 教育心理学研究 第29巻 第4号, 323-332.
- Hayes, J. R. & Flower, L. S. 1980 Identifying the organization of writing processes. In L. Gregg & E. Steinberg (Eds.), *Cognitive processes in writing*, Hillsdale, N. J.: Lawrence Erlbaum Associates.
- 堀田朱美 1989 文章表現及びその産出過程における批判の影響 1988年度修士論文
- 小林夏子 1989 人称表現と短歌形式が読解に与える効果 日本教育心理学会第31回総会発表論文集 291.
- Scardamalia, M., Bereiter, C., & Steinbach, R.

資 料

- 1984 Teachability of reflective processes in written composition. *Cognitive Science* 8, 173-190.
- 内田伸子 1982 幼児はいかに物語を創るか? 教育心理学研究 第30巻 第3号, 211-222.
- 内田伸子 1986 ごっこからファンタジーへ—子どもの想像世界— 新曜社
- 内田伸子 1989a 子どもの推敲方略の発達—作文における自己内対話の過程— お茶の水大学人文科学紀要, 42,75-104.
- 内田伸子 1989b 幼児心理学への招待—子どもの世界づくり— サイエンス社.
- 依田新 編 1979 新・教育心理学事典 金子書房
- 〔謝 辞〕
実験に御協力くださった, 名古屋文化学園保育専門学校の皆様, 春日井市立篠木小学校の奥村浩康校長先生をはじめとした皆様に, 記して感謝いたします。
(1992年8月28日 受稿)

ABSTRACT

Content and Rethorical Intentions
on Process of Discourse Production

Akemi HOTTA

In this study, writers' intentions on process of discourse production were investigated. Intentions contain two dimensions, content and rethorical. Two-hundreds and forty-four adults and two-hundreds and forty-six fifth and sixth graders in elementary school were given incomplete story and asked to complete it. Following task, they also asked to write their introspective report about the production. That reports were categorized into three types of intentions: content, rethorical and other.

Rethorical intentions were reported significantly more often by adults. Difference among three types were also significant (other>content>rethorical). Intentions which shows high frequency were investigated. Adults tend to refer to readers impression, while children merely refer about readers. Adults also took care about "how would readers read it", but children cared about only "what to write". Subjects were categorized into two types, subjects who reported reflective intentions after production and who did not. Reflective reports were refered by significantly more adults than children. Some adults repared their discourse after reflective monitoring.

From the results, it was suggested that although children's writing process does not contain readers in it, adults' writing process contains readers in it. It seems that as children grow up, reader or listener in selves grow up.